り嬢の著書中主なる者を擧ぐれば「病院に關して」「看護婦に關して」「印度駐在軍隊の衞生狀態」「産科病院に關する意見」「印度に於ける生死」等なり。

嬢は又熱心なる女子選擧權運動者にして「すべて一家の家政を掌る者及び納稅者は國家の支出費に對しても發言權を有するの權利あるは自明の原則なり」と唱へ居れり。嬢は數年前より中風症に罹りて一切の訪問客を謝絶しロンドンパークレーンに靜養せられしも急に病革さりて長逝の訃に接す悲しい哉。

バイオリンの話

礫々生

西洋音樂に對する趣味は近頃大層普及して參りましていかなる寒村僻地にありましてもオルガンの音やバイオリンの響を聞かない事はないやうになつて參りました。殊に都會にありましては到る所

到る辻々に日本古來の樂器なる三味線や琴の音を壓倒しはバイオリンやオルガンの響が致します。今やバイオリンやオルガンは殆ど中流以上の家庭には欠ぐ可らざるものゝ一つとなりました。實にその價は一筋の帶一個の指環よりも廉く然かもオルガン又はバイオリンの家庭に貢獻する所のものは決して些少ではありません。例へば家庭の平和をまし又は個人の趣味をたかめる等誠とに枚擧するにいとまがありません。

ピヤノは其の價のあまりに高價なる爲めに重もに上流社會の家庭にのみ限ぎられてある觀が致しまするが之に反しバイオリンは比較的その價が低廉なるがためその學習法の至難なるにもかゝはらずあらゆる方面に流行致して居ります甚だしきに到つてはバイオリンを逆に持ち寫眞をとる人が生ずるに到つてはバイオリンの爲めに泣かなければなりません。餘事は偖ておいてバイオリンは何時頃から出來たかと申しますると西暦三百五十年前伊太利に於て始めてマジニ。ハデサラなど云ふ人が製造した物です。バイオリンにも幾多の變遷が

ありまして昔から現今の樣な物ではなかつたのであります。昔はバイオルと稱して四本又は五本の金屬製の絃を持つて居りまして指板と申して我々が指で絃を壓し種々の樂音を出す所に月琴のやうに假柱がありました。此の假柱によつて樂音を容易に得るのたすけをなしたのです。其の後此の假柱を取去るについては當時の音樂者は皆その無謀なるを嘲りました。然し假柱によつて樂音を得やうとする時は手指の熟練にのみ重きを置きます速い速度の曲を演奏する時は指は速やく假柱の上を滑らなければなりませんけれども今や假柱が取り去られた曉にはたゝはやく指が指板の上を滑るばかりでなく同時に正確なる樂音を得なければなりません。

されば今迄はたゝ手指の練習ばかりでしたのが更らに聽覺によつて音の正否を區別しなければならなくなつたのです。即ち假柱を取りさつた爲めにバイオリンは學習するのに一層困難になつたのです。然し假柱にばかりたより指の熟練にのみ重きを置くよりも微妙なる人の聽感に訴へて演奏する方が一層靈妙なる樂音が自由自在に得ると云ふ事は明かであります。現在のピヤノ若くはバイオリンに於ましてもし我々が要求するだけの樂音を得ませうとすれば鍵の數をもつとづつと增さなければなりませんがバイオリンは演奏者の耳さへよければ即聽感さへ充分に發達して居りますればいかなる美妙なる樂音も得る事が出來るのであります。之れがバイオリンの最も勝つた點で又同時に學習者の最も困難に感ずる所なのであります。バイオリンは他の樂器に比して比較的演奏者の心をうけて悲哀壯嚴にも敏捷快活にも奏する事が出來ます。バイオリンは死物ですけれどもまるで奏演者の心がバイオリンと身を化して歌つてゐるやうに四つの糸が唱り響く時の心地は自ら手にした人でなければ到底想像の出來ない愉快さであります。